

<解 説>

最近における

果樹生産の動向

本稿では、とくに最近における果樹生産の動向に焦点をしばって、その展望を試みることにしたい。

①果樹栽培の増加傾向

全国の作付延べ総面積に占める果樹栽培面積は、昭和37年3.6%、42年5.5%で37年の35%増加である。

また果樹栽培面積の増加状況を見ると、34年は前年より1万4,700haの増加、以後38年まで1万6,000~1万9,000haの増加を続け、39~40年には2万2,000ha増加した。(これがピーク)、41~43年には1万8,000haの増加を続けている。

つまり、32年~37年は20万haを持続、38年~42年は30万haだったものが、43年には40万6,000haとなった。

増加の中心は主として、みかん、かんきつ類等で、増加要因は大型機械による開墾とともに、開園は共同化によって大規模化したほか、いろいろな施設が導入されて経営規模が拡大しているためであろう。

(ア) 主要果樹栽培面積

みかん…は、昭和33年まで年間3,000ha程度増加を続けたが、35年~37年は7,000haの増加(りんごの栽培面積を上回る。)また39~43年は1万1,000haの増加を続けている。増加の原因は主として九州地方における増加によるものである。

なつみかん…は、35年以降年間1,000haの増加

りんご…は、30年~34年は年間3,300haの増加で、みかんを上回っていたが、35年~37年には1,600haの増加と鈍化し、38年~41年は殆んど増加せず、43年は逆に前年より1,700haの減少となった。

ぶどう…は、32年以降38

年までは年間1,500~1,900haの増加を続けたが、39年以降はむしろ停滞傾向にある。

もも…は、32年まで大幅な増加を続けたが、33年以降は増勢は鈍化し、43年には200ha減少した。

日本なし…は、32年までは顕著に伸びたが、37年以降は鈍化、42年は前年より減少し、43年は更に減少した。

くり…は、35年までは若干の増加、または減少ぎみに推移したが、36年に1,000ha増加したのをはじめ、38年は前年より3,800ha、39年は前年より6,500haと大幅に

主産県別主要果樹栽培面積の動き

年次	み かん			み かん		
	順位	占有率	生産県	順位	占有率	生産県
昭和27	1	20	静岡	1	13	愛媛
	2	12	和歌山	2	12	静岡
	3	11	愛媛	3	9	長崎
	4	7	広島	4	8	和歌山
	5	5	神奈川	5	8	長崎

九州地方の新植の増加が作付増に強く影響している。

年次	夏 み かん			夏 み かん		
	順位	占有率	生産県	順位	占有率	生産県
昭和27	1	19	愛媛	1	22	愛媛
	2	15	和歌山	2	15	和歌山
	3	11	山口	3	10	熊本
	4	10	静岡	4	7	静岡
	5	6	愛知	5	6	山口

果樹種類	年 次							
	昭和31	32	33	34	35	36	37	
みかん	4,400	3,500	2,100	6,400	7,300	8,000	8,800	
なつみかん	1,110	390	620	580	1,220	1,300	900	
ネーブルオレンジ	△ 20	△ 30	△ 30	△ 20	0	60	20	
その他かんきつ	160	510	190	270	640	740	630	
りんご	3,600	4,000	△ 2,500	3,100	1,600	1,600	1,200	
ぶどう	770	1,990	900	1,800	1,500	2,300	1,900	
日本なし	2,200	1,500	800	800	900	1,100	700	
西洋なし	30	0	△ 10	△ 20	180	10	210	
もも	3,800	2,300	600	1,200	1,100	900	500	
おうと	140	0	60	110	30	200	130	
うめ	100	△ 110	△ 190	30	230	340	470	
びわ	130	120	△ 50	30	50	50	60	
かき	1,600	1,100	200	400	800	1,500	600	
かく	260	△ 170	△ 90	△ 110	230	1,040	1,300	
計	18,300	15,100	7,600	14,700	15,800	19,400	17,500	

果樹種類	年 次						
	昭和38	39	40	41	42	43	
みかん	9,800	11,600	13,900	11,600	12,500	11,600	
なつみかん	900	700	1,100	1,300	1,000	800	
ネーブルオレンジ	20	0	15	△ 7	△ 32	△ 68	
その他かんきつ	800	710	500	△ 660	850	820	
りんご	600	0	300	0	△ 400	△ 1,700	
ぶどう	1,500	800	900	300	200	0	
日本なし	100	0	100	△ 100	△ 400	△ 200	
西洋なし	160	90	20	10	△ 130	△ 120	
もも	100	300	0	400	200	△ 200	
おうと	90	80	60	50	△ 70	10	
うめ	580	880	1,300	1,500	1,300	600	
びわ	10	△ 90	△ 70	△ 90	△ 160	△ 40	
かき	200	400	400	200	△ 100	△ 600	
かく	3,800	6,500	4,500	2,700	3,700	2,600	
計	18,600	22,000	23,000	18,500	18,500	18,100	

増加、40年以降は年間3,000haの増加を続けている。

りんご				りんご			
年次	順位	占有率	生産県	年次	順位	占有率	生産県
昭27	1	56	青森	昭42	1	39	青森
	2	16	長野		2	22	長野
	3	6	岩手		3	9	岩手
	4	3	秋田		4	6	山形
	5	2	福島		5	5	山形

りんごは近年、高級品種への更新が行なわれているため、国光、紅玉などの栽培面積が多かった、これまでの大産地、たとえば青森県ではその影響がとくに大きい。

ぶどう				ぶどう			
年次	順位	占有率	生産県	年次	順位	占有率	生産県
昭27	1	17	山梨	昭42	1	17	山梨
	2	11	岡山		2	10	岡山
	3	10	大阪		3	9	山形
	4	7	山形		4	7	福長
	5	6	長野		5	6	福長

近年、大産地である山梨、岡山両県の増加は著しい。

もも				もも			
年次	順位	占有率	生産県	年次	順位	占有率	生産県
昭27	1	15	岡山	昭42	1	16	福島
	2	7	福山		2	15	山梨
	3	6	山梨		3	9	山形
	4	6	香川		4	8	山長
	5	6	愛知		5	7	岡山

最近のもも栽培生産県は、西日本の旧産地が衰退し、東日本への進出で大きく変化している。

日本なし				日本なし			
年次	順位	占有率	生産県	年次	順位	占有率	生産県
昭27	1	11	鳥取	昭42	1	13	鳥取
	2	9	福島		2	8	埼玉
	3	5	新潟		3	8	福島
	4	4	千葉		4	8	福千
	5	4	福岡		5	7	茨城

日本なしは、鳥取県の増加と、関東、東北地方の主産県の増加が顕著である。

かき				かき			
年次	順位	占有率	生産県	年次	順位	占有率	生産県
昭27	1	13	愛媛	昭42	1	6	山形
	2	12	福島		2	6	福島
	3	11	愛知		3	5	島根
	4	10	和歌山		4	5	歌山
	5	9	岐阜		5	5	愛知

近年、大産地の占有率が殆んど同率化している。

くり				くり			
年次	順位	占有率	生産県	年次	順位	占有率	生産県
昭27	1	24	茨城	昭42	1	16	茨城
	2	6	兵庫		2	8	愛媛
	3	5	愛媛		3	7	熊本
	4	5	岐阜		4	5	岡山
	5	4	福岡		5	5	山口

(ウ)みかんの新植動向

全国の最近5カ年間(39~43年)の新植面積は5万2,000haで、これは実に9年前のみかん栽培面積に匹敵し43年栽培面積の35%を占めている。

また、5カ年間の新植開園別は畑からの転換47%、開

墾によるもの42%、田からの転換11%となっている。

これを地域別にみると

・九州は39年以降活発に行なわれ毎年5,000ha以上

・四国では2,000ha前後の新植が続き

この両地域で全国の新植面積の70%を占めている。

更にこの両地域の新植傾向を示すと

・四国地方は、畑から転換したものの51%、開墾によるものの34%、田から転換したものの15%となっている。

・九州地方では、開墾によるもの51%、畑から転換したものの45%、田から転換したものの4%となっている。

また、先進地域と新興地域の新植状況を39年~43年の累計新植面積でみると、次のとおりである。

〔静岡〕43年全国みかん栽培面積の11%を占めた先進地域静岡では、毎年500ha程度の増加を続けているが5カ年累計では2,500haで、43年栽培面積の15%に過ぎない。新植は、畑から転換したものの50%、開墾によるものの38%、田から転換したものの12%となっている。

これまで機械開発会社が造成を進めてきたが、現在では拡張には限界が出てきているようである。

〔愛媛〕愛媛は全国栽培面積の13%を占め栽培面積では全国第1位で、新植は毎年1,200ha前後で、5カ年累計では6,200haと、43年栽培面積の32%を占めている。この内訳は、畑から転換したものの52%、開墾によるものの34%、田から転換したものの14%となっている。

愛媛県の新植が活発なのは、県下全域が地質、気象条件ともに適地であるうえ、みかんは他作物より経済性が高いこと、全国的な銘柄品として市場の優位性を保ってきたことから、農業改善事業を中心として積極的に経営規模の拡大が計られているほか、密植栽培には早期結果の可能性があるので、技術的にも、一般的に新植が浸透しているからであろう。

〔佐賀〕新興地域である佐賀県は全国栽培面積の8%を占めているが、毎年1,000ha前後の増加を続け、5カ年累計では5,000haで、43年栽培面積の40%を占めている。新植は開墾によるもの59%、畑から転換したものの32%、田から転換したものの9%となっている。

これは適地が豊富なため、農林業制度金融の強化で集団開墾が活発に行なわれ、一方、低位生産地の稲作や畑作からの切替えが行なわれている為と思われる。

〔長崎〕長崎は全国栽培面積の9%を占め、毎年1,300ha前後の増加を続け、5カ年累計では6,600haで、34年栽培面積の51%を占めている。新植状況は畑から転換69%、開墾によるもの29%、田から転換2%である。

これらの新植は、普通作物にくらべて収益性がかなり高いため、近年はとくに小規模農家の、畑からの転換が活発で、この傾向は今後も続くと思われる。